

GUIDE BOOK

Journey. One thousand years. The six ancient kilns.



旅する、千年、六古窯

火と人、土と人、水と人が出会った風景

「旅する、千年、六古窯」ガイドブック

p.04 はじめに

p.06 六古窯とは

各古窯／産地を知る

p.10 越前焼

p.20 瀬戸焼

p.30 常滑焼

p.40 信楽焼

p.50 丹波焼

p.60 備前焼

p.70 参考文献リスト、執筆者一覧

六古窯を知る

p.73 中世の壺と瓶 ―「宝瓶」としてのイメージ
荒川 正明
(学習院大学文学部 教授)

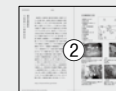
p.76 中世六古窯への誘い
井上 喜久男
(元愛知県陶磁資料館 館長補佐)

p.78 六古窯を知るためのブックリスト

この本の読み方

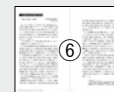
本書は、大きく2編に分かれ、前半では六古窯それぞれの特徴を、後半では六古窯全体のことを俯瞰して紹介しています。産地・古窯ごとに比較し、共通している部分や、固有の魅力を探してみましょう。

各古窯／産地を知る



- ① 各産地の扉ページ
- ② 各産地の特徴について、日本遺産構成文化財と合わせて紹介しています。
- ③ 原材料や技法・技術、窯といった視点から、やきもの特徴をとらえています。
- ④ 各産地がつくってきたやきもの歴史を、現代に至る6つの時代ごとに紹介。
- ⑤ 6市町それぞれの担当学芸員による、やきもの可能性を読み解くコラム。

六古窯を知る



- ⑥ 六古窯を美術／考古の視点で見るとの、研究者による論考。ここでは各古窯を横断して眺めてみます。
- ⑦ 六古窯日本遺産活用協議会クリエイティブ・ディレクター選出の参考図書。六古窯の視点でやきものについて考えるための書籍を紹介。

この本を読んだあとは……

○ 書かれている言葉や図版をもとに、自分たちの地域にあるやきものと比べて考えてみてください。 ○ やきもの魅力をほかの人に伝えられるような、自分にしっくりくる言葉を探してみましょう。 ○ 本書をポケットに入れて六古窯を巡り、現地環境や営みから、約1,000年続いてきた産地の時間を想像してみましょう。

はじめに

2017年春、文化庁から日本遺産の認定を受け、ろっこよう六古窯日本遺産「旅する、千年、六古窯」プロジェクトが立ち上がりました。

全国に6つある産地の連携を深め、国内はもとより海外にも六古窯の魅力を伝えるべく、Webサイトやタブロイド紙、インタビュー映像などのメディアを制作。日本遺産認定自治体の観光振興を主な目的としつつも、訪れる人を迎える産地の担い手や住まう人々が、地域固有の歴史や文化に改めて目を向ける機会となるよう、さまざまな事業に取り組んでいます。

そのなかで「六古窯ってなに?」と聞かれることが多々あります。その全貌を正確に答えることは、ほとんどの人にとって難しいことでしょう。それは、日本列島に点在する産地が人やもの・技術を介して交流しながら、中世から現在まで約1,000年続く圧倒的な時間のなかで、時代の要請に合わせてやきものをつくってきたという、複雑な関係性に答えがあるからです。

そこで、産地で活動するつくり手や伝え手に向けて、六古窯の各産地を紹介するガイドブックを制作しました。六古窯の起源や変遷を紐解き、各古窯の場所、原料となる土や成型・焼成技術、器種などについての共通点や特異点を可視化し、各古窯を横断・比較しながら、六古窯の全容を知ることのできる内容となっています。

本ガイドブックは、六古窯各産地の学芸員に協力いただき、完成しました。六古窯についてもっと知りたいという人は、ぜひ学芸員が所属するそれぞれの美術館や資料館を訪ねていただきたい。そして、各産地での体験をまた別の人に伝えていただきたいと思います。一度きりの観光では終わらない、産地間の新たな交流を生み出すきっかけとなれば幸いです。

六古窯日本遺産活用協議会

旅する、千年、六古窯

火と人、土と人、水と人が出会った風景



日本人とやきもの関わりは縄文時代に遡ります。やきものは、食糧の保存や調理などの生活用具や祭祀用具など、人間の営みに必要不可欠なものとして文明を築き、分野を超えて、さまざまな文化を深めてきました。

「日本六古窯 (にほんろっこよう)」は、古来の陶磁器窯のうち、中世から現在まで生産が続く代表的な6つの産地(越前・瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前)の総称です。1948年頃、古陶磁研究家・小山富士夫によって命名され、2017年春、日本遺産に認定されました。それを機に6市町*では、六古窯日本遺産活用協議会を発足。1,000年にわたり、各産地にて育まれてきた技術・文化を見つめ直し、また俯瞰した視点で、改めて、六古窯の魅力を掘り下げています。

「旅する、千年、六古窯」プロジェクトは、「やきもの」を通して、人間の根源的な営み、人と自然との関わり、ものづくりの根源を再考する取り組みです。1,000年という時をかけて育まれてきた6つの産地にある「火と人、土と人、水と人が出会った風景」を通して、千年先の未来を思い描きたいと思います。

*六市町

越前焼: 福井県越前町 瀬戸焼: 愛知県瀬戸市 常滑焼: 愛知県常滑市
信楽焼: 滋賀県甲賀市 丹波焼: 兵庫県篠山市 備前焼: 岡山県備前市

各古窯／産地を知る

越前焼 — p.10 >

瀬戸焼 — p.20 >

常滑焼 — p.30 >

信楽焼 — p.40 >

丹波焼 — p.50 >

備前焼 — p.60 >

ECHIZEN WARE

越前焼

福井県 越前町

面積：153.15km²

総人口：21,661人 ※平成31(2019)年1月現在

名産：窯業、越前水仙、たけのこ、しいたけ、ピーマン、きゅうり、米、越前がに、越前がれい、へしこ、豆腐、マリンバほか

古来より越前がに、越前雲丹の主産地で、その美味風味は全国にうたわれ、越前岬は日本海航路の道しるべとして有名であったため、希望に満ち、将来の発展を期して越前町と選定した(『越前町史』より)。また、平成17(2005)年に4町村(朝日町、宮崎村、越前町、織田町)が合併した際に旧越前町の町名を踏襲した。

北陸最大の窯業産地 福井県越前町

越前町は、福井県の嶺北地方西部に位置するまち。日本海に面し、越前市、鯖江市、南越前町、福井市と隣接しています。大半が丹生山地に属し、沿岸部から北部にかけて500メートル級の山々が連なる地域です。越前のやきものの起源は約1,500年前にまでさかのぼりますが、産地としてののはじまりは約850年前の平安時代末期。現在までに200基以上の窯跡が発見されており、主に壺や甕、挿鉢、舟徳利、お歯黒壺といった日常雑器を中心に生産していました。中世には、越前海岸に近い立地で生産された商品は、北前船によって北は北海道、南は島根県まで広まり、北陸最大の窯業産地として発展。しかし、明治時代に入り、水道の普及や磁器製品が広まるにつれて需要が落ち込み、衰退した時期も。その後、地元の古窯研究者・水野九右衛門と、日本を代表する陶磁器研究者・小山富士夫が行った調査研究により、昭和23(1948)年、六古窯のひとつとして数えられ、全国に知られるやきものとなりました。また、昭和45(1970)年からはじまった越前陶芸村の建設により、窯元数及び生産額が飛躍的に増加し、産地再興を図ることに成功しました。昭和61(1986)年には国から伝統的工芸品として指定を受け、古くからある技術を継承するとともに、多くの陶工が新しい越前焼の創作に取り組んでいます。

日本遺産構成文化財

1. 越前焼(※付近一帯)
2. 劔神社本殿
3. 陶芸越前大がめ捺じたて成形技法
4. 神明ヶ谷須恵器窯跡
5. 越南窯
6. 劔神社文書
7. 越前窯跡群(※付近一帯)
8. 北釜屋甕墓
9. 三筋壺
10. 越前赤瓦
11. 越前瓦(※付近一帯)



神明ヶ谷須恵器窯跡

4

越前焼以前の須恵器生産の実態を示す遺跡。窯体が覆い屋で保存されている。

写真提供：越前町

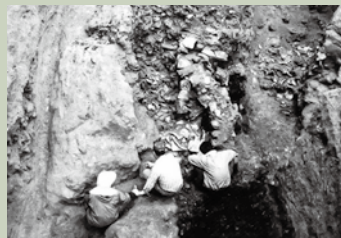


越南窯

5

瀬戸の加藤唐九郎の指導により築窯した、幻の登窯。

写真提供：越前町



越前窯跡群

7

中世・近世の越前焼生産の実態を示す遺跡。町内に200基を超える窯跡が存在する。

写真提供：越前町織田文化歴史館



北釜屋甕墓

8

越前焼生産に従事していた職人の墳墓。甕を墓標とするなど、全国でも希有な事例。

写真提供：越前町織田文化歴史館

越前焼の特徴



越前焼 大甕
所蔵・写真提供：福井県立越前古窯博物館

越前焼は東海地方の技術を導入して12世紀後葉に開窯し、主に壺・甕・播鉢などの日常雑器を焼締で生産していました。室町時代後期には日本海側で最大の窯業地に発展しましたが、全国的に茶陶の生産がはじまる桃山時代にも越前では日常雑器の生産を続けていました。権力者・知識人のために茶陶の生産を行わなかったことは越前焼衰退の遠因とされますが、一貫して民衆のために生産された越前焼には素朴な美しさがあります。江戸時代になると焼締よりも効率的に生産できるように赤土を表面に塗るようになり、藁灰釉による装飾も行われました。

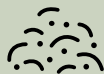


越前焼 お歯黒壺
所蔵・写真提供：福井県立越前古窯博物館



越前焼 大壺
所蔵・写真提供：福井県立越前古窯博物館

原材料



腰が強く耐火度も高い越前の土はよく焼き締まる性質があるので、大壺・大甕のような大型製品の生産に適しています。陶土の採掘場所と窯跡の場所には相関がなく、江戸時代までは特定の3ヶ所から採取した「山土」を用いていました。江戸時代初頭になると、田から採取した「田土」へと変わりました。

技法



「ねじたて技法」と「ねじたてロクロ技法」の2つの技法があります。「ねじたて技法」は陶工が粘土紐を持って周囲を回りながら円筒状に積み上げ、「はがたな」と呼ばれる木ごてで薄く引き伸ばす作業を何度も繰り返して形づくる技法です。



8代目藤田重良右衛門
写真提供：福井県立越前古窯博物館

技術



中世までは赤褐色の地肌と緑色の自然釉を特色とする「焼締」を主体としていました。江戸時代初頭には鉄分を多く含む赤土を表面に塗り、焼締より短い焼成時間でも水漏れを防ぐ工夫が施されるようになりました。



越前焼 壺
所蔵・写真提供：福井県立越前古窯博物館

窯



東海地方の瓷器系窯の構造と酷似する窰窯^{あながま}を用います。開窯期の平安末期には10メートル程度だった窯の全長は生産がピークに達する室町時代後期には25メートル前後にまで大型化し、火の回りを良好に保つため傾斜も急になりました。



水上2号窰
写真提供：福井県立越前古窯博物館

越前焼の歴史

越前窯の開窯

平安時代末期



越前焼 三筋壺
所蔵：越前町教育委員会 写真提供：越前町織田文化歴史館

10世紀初頭に須恵器窯が開窯すると、越前では陶器生産が途絶えます。再び窯業が活発になるのは12世紀後葉のことで、東海諸窯の技術を導入して越前窯が開窯します。当初は天王川東部丘陵の越前町小曾原周辺に窯が築かれ、小規模な生産が行われていました。

越前赤瓦の誕生

江戸時代



越前赤瓦
所蔵：越前町教育委員会 写真提供：越前町織田文化歴史館

17世紀中葉、新たに瓦の生産がはじまりました。越前の瓦は鉄分を含む土壌を水に溶いた釉薬を用いることで赤黒く発色し、「越前赤瓦」と呼ばれます。後に造瓦技術は東北地方にまで及び、北海道函館市の箱館奉行所の屋根にも越前赤瓦が葺かれています。

生産の本格化

鎌倉・室町時代



越前焼 双耳壺
所蔵：写真提供：福井県陶芸館

13世紀になると操業地は天王川西部丘陵に移り、壺・甕・播鉢を中心に日常雑器が生産されました。鎌倉時代には水注・水瓶・経筒など宗教的色彩の濃い製品もつくっています。室町時代にかけて窯体の規模は次第に大きくなり、生産量が上昇していきました。

「白いやきもの」を求めて

明治～昭和時代

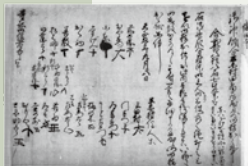


白磁金彩花鳥花瓶 葵園
所蔵：銀神社 写真提供：越前町織田文化歴史館

平等村に築かれた登窯で越前焼の協同生産が行われる一方、明治時代になると陶業振興や技術革新が図られます。「白いやきもの」である磁器生産を目指し、宮崎村小曾原の山内伊右衛門は日涉園の設立に参加し、平等村の吉田長兵衛は葵園を開窯しました。

大量生産の志向

戦国時代



劔大明神領分平等村田島居屋敷指し出状
所蔵：銀神社 写真提供：越前町織田文化歴史館

戦国期の城下町建設に伴う需要の高まりに応じるべく、越前窯では巨大な窯体を築き、さまざまな技術革新が図られました。生産体制も一新され、この頃には北海道から島根県までの日本海側一帯に製品が流通し、越前は北陸最大の窯業産地となります。

「越前焼」の命名

現代



福井県立越前古窯博物館
写真提供：福井県立越前古窯博物館

第二次世界大戦後に窯業試験場が開設されると、陶土の開発を積極的に行うなど窯業生産の機運が再び高まります。この頃、「小曾原焼」「織田焼」など地域によって名称が異なる陶器について「越前焼」と命名され、全国にその名が定着していきました。

越前焼の魅力、その可能性

越前焼を六古窯にした立役者

福井県立越前古窯博物館 学芸員

一瀬 諒

越前町織田文化歴史館 学芸員

小辻 陽子

越前焼は江戸時代から衰退がはじまり、終戦後の織田村(現越前町)では窯元1軒を残すのみとなっていた。この危機を救ったのが、越前古窯研究の第一人者であった水野九右衛門(1921-89年)である。水野は高校教諭として教鞭をとる傍ら、窯跡の調査・編年等の研究を行った。その結果、越前古窯が平安末期に遡ることが明らかとなり、小山富士夫(1900-75年)が「越前は瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前と匹敵する」と発表して「日本六古窯」の概念に発展する。「越前焼」の名称は水野と小山、北野七左衛門(1912-89年)らが考案したものである。(一瀬)

その北野は織田村に「八剣窯」(後に「北窯洞」)を開く窯元であった。当初は絵付を施した作品をつくっていたが、次第に元来の越前焼のような土味を生かした風合いで、手びねりの作品に変わっていく。

芥川賞作家の津村節子氏(1928年-)は、故郷の福井県を題材にした小説「ふるさと5部作」の1作目として、越前焼窯元をめざす女性を主人公に『炎の舞い』を書いた。この小説に登場する古越前研究者の水谷先生は水野を、老陶芸家の萩野庄右衛門は北野をモデルとしている。(小辻)



水野九右衛門
写真提供：福井県立越前古窯博物館



北野七左衛門
写真提供：北野左京氏



SETO
WARE

瀬戸焼

愛知県瀬戸市

面積:110.40km²

総人口:129,754人 ※平成31(2019)年1月現在

名産:窯業、赤津焼(伝統的工芸品)、瀬戸染付焼(伝統的工芸品)、セトノベルティ、^が碁子、^がファインセラミックス、ガラス工芸品、瀬戸焼そば、ごも飯、瀬戸の豚など

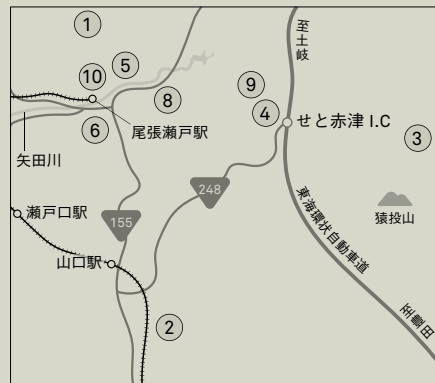
陸地の通路が狭く、谷と谷が向かい合わせの土地「背戸」が由来と言われ、「陶所」=「すえと」が転じて「瀬戸」になったという俗説もあり。周囲を標高100～300メートルの小高い山々に囲まれ、気候も温暖。

愛知県瀬戸市 「せともの」を担う、 世界屈指の産地

約1,000年前から一度も途切れずやきもの生産を続けてきた、世界的にも稀有な産地。日本で陶器一般を指す「せともの」という言葉は、長い歴史のなかで、やきものづくりを牽引してきた瀬戸焼からきています。瀬戸焼の起源は、5世紀後半に現在の名古屋市・東山丘陵周辺で、須恵器の生産を行っていた^{さなげよう}猿投窯。丘陵地帯には瀬戸層群と呼ばれる地層があり、やきものの原料となる良質の「^{きぶしねんど}木節粘土」「^{がいろぬねんど}蛙目粘土」や、ガラスの原料となる珪砂を採取することができました。山間地帯には、松などの樹林が広がっており、瀬戸の恵まれた自然が窯業発展の大きな支えとなってきたのです。12世紀終わりには古瀬戸の生産がはじまり、当時国内唯一の施釉陶器生産地として、四耳壺、瓶子、水注がつくられました。19世紀に入ると磁器の生産もはじまり、アメリカへの輸出や万国博覧会への出品など、海外との交流が盛んに。また、それによって染付の顔料となる酸化コバルトや石膏型による成形法など西洋の技術が取り入れられました。近代化に伴う鉄道の敷設などのインフラ整備が進むとともに、窯道具を利用した「窯垣」が広がり、陶都瀬戸ならではの景観が形成されました。現在も時代の変化とともに移り変わっていく生活様式に対応して、食器やノベルティ、自動車の部品など、多種多様な製品を生み出し続けています。

日本遺産構成文化財

1. 陶土・珪砂採掘場
2. 広久手第30号窯跡
3. 瀬戸窯跡 小長曾陶器窯跡
4. 瀬戸窯跡 瓶子陶器窯跡
5. 陶製拍犬
6. 古瀬戸瓶子
7. 窯垣
8. 窯垣の小径
9. 赤津瓦(集中地区)
10. やきもの祭り



瀬戸窯跡 小長曾陶器窯跡

3

室町時代の古瀬戸を生産した赤津の窯跡。その300年後、尾張藩の命で茶陶を生産。



古瀬戸瓶子

6

鎌倉時代中期、古瀬戸前期に生産。武家の都である鎌倉に運ばれた製品の代表格。



窯垣の小径

8

洞の生活道路として、また、窯の燃料や製品を運ぶ産業道路として活用された道。



やきもの祭り

10

瀬戸を代表する陶磁祖を称える「せと陶祖まつり」(4月)、「せともの祭」(9月)。

瀬戸焼の特徴



鉄釉仏花瓶
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市

中国陶磁を彷彿とさせる白い素地
が特徴。陶土採掘場から採集される木
節粘土と蛙目粘土は、耐火性が高く
可塑性に富み、粘土中には鉄分がほ
含まれないことから白いやきものをつ
くり出すことが可能です。それを活か
したさまざまな施釉製品が生み出され、
瀬戸焼の特徴となりました。白い陶器
素地に大胆な筆使いで鉄絵を施し、灰
釉を掛けて焼成した馬の目皿や鉄絵
皿、多彩な釉薬を掛け分ける本業焼、白
い磁器素地に青く発色するコバルト顔
料(呉須)で絵付を施し、その上に透明な
釉薬を掛けて焼成する瀬戸染付など、
多様な技法が用いられています。

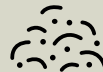


石炭窯
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市



染付鳳凰文炉縁
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市

原材料



木節粘土は、その優れた可塑性が特徴で、微細な石膏型の凹凸を写し取ることができます。蛙目粘土は、含まれる珪砂が反射で光ることからこう名付けられ、粘土と分離された珪砂はガラス原料として利用されています。また釉薬原料である鬼板や岩呉須なども砂礫層に含まれます。こうした優れた原材料が瀬戸窯業を支えています。



陶土・珪砂採掘場(2004年撮影)
写真提供：瀬戸市

施釉技術

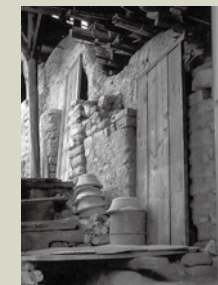


瀬戸で最初に用いられた釉薬は木灰を原料とする灰釉です。その後中世になって鬼板など酸化鉄を用いた鉄釉が始まり、調合技術の発展により、黄瀬戸や錆釉などが登場します。近世初頭には銅を呈色材とする緑釉や長石主体の志野釉が茶陶類を彩り、近世後期の染付製品にはイス灰などを原料とする透明釉が用いられます。近代になると、銅版転写や人工呉須など西洋からの技術や原料が導入され、量産化が進められます。

窯



古代から中世にかけては、丘陵斜面をトンネル状に掘った地下式あながまの窯で焼成され、施釉陶器には降灰を防ぐためえんころ匣鉢が用いられます。地上式の大窯になると、匣鉢内に製品を複数組み合わせ、高く積み上げる窯詰め方法が考案され、近世においては連房式登窯が導入され、量産に適した窯詰め方法が工夫されています。



古窯(瀬戸染付工芸館内)
写真提供：瀬戸市

瀬戸焼の歴史

瀬戸窯の開始と灰釉陶器の生産

平安時代後期



灰釉縄手付瓶
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市

10世紀後半の猿投窯の拡散に伴い、瀬戸市南部でも灰釉陶器窯の操業がはじまります。焼成器種は碗・皿類を中心に瓶・壺類などもみられ、緑釉陶器の素地なども焼かれていました。11世紀後半になると、量産化に伴い粗雑化し、碗・皿類が主体の生産となっていきます。

「せともの」の成立

江戸時代



馬の目皿
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市

美濃に移っていた陶工が、尾張藩の成立とともに瀬戸へ呼び戻されます。しかし肥前磁器や京焼など新たな窯業地が出現し、瀬戸は高級陶器から日用陶器の生産地へ変化します。19世紀に入ると磁器生産も開始され、その広がりとともに「せともの」の名が定着します。

山茶碗と古瀬戸

平安末～室町時代



灰釉菊印花文四耳壺
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市

11世紀になると東海地方の灰釉陶器窯は施釉技法を放棄し、無釉の山茶碗生産に移行します。12世紀末になると瀬戸窯では「古瀬戸」と呼ばれる中国陶磁をモデルとした施釉陶器の生産が市域南部ではじまり、中世では国内唯一の施釉陶器産地として発展していきます。

世界にはばたいた瀬戸焼

明治時代



染付花鳥図獅子鈕蓋付大飾壺
所蔵：瀬戸蔵ミュージアム 写真提供：瀬戸市

明治時代になると、輸出用陶磁器の開発が積極的に進められます。欧米を中心に開催されていた万国博覧会へ出品された瀬戸の製品は、数多くの賞を受け、高い評価を得ています。また、これを契機にヨーロッパの製陶技術や原料が導入され、技術革新が進みました。

「山の窯」から「里の窯」へ

室町・戦国時代



昔田窯跡
写真提供：瀬戸市

室町時代後半、大名や町衆など新たに勃興してきた階層の需要に応じ、碗・皿類をはじめとする高級食器類や茶陶類などが量産されます。窯は量産に対応した地上式の大窯が登場し、それまで丘陵内に拡散していた窯場が集落近くへ集中するようになります。

陶都瀬戸

現代



せともの祭
写真提供：瀬戸市

明治中期には陶器学校や窯業試験場の開設、鉄道開業による輸送体制の拡充など近代窯業地としてのインフラ整備が進みます。大量生産のための機械化や石炭窯などの導入も進み、窯元や職人が集まる「陶都」として、今に至るまちの景観が形成されます。

瀬戸焼の魅力、その可能性

陶祖と磁祖、2つの創業伝説

瀬戸市文化課 主幹
服部 郁

瀬戸には2人の創業者がいる。「陶祖」と「磁祖」である。陶祖は藤四郎(加藤四郎左衛門景正)といい、曹洞宗の開祖道元と共に宋に渡り、製陶技術を習得して帰国し、瀬戸の地で良土を発見して開窯したとされる伝説上の人物である。一方、磁祖は加藤民吉といい、文化年間に九州の天草や佐々で製磁技術を習得し、帰郷して瀬戸の製磁技術の改良に貢献したとされる実在の人物である。陶器と磁器を共に生産している瀬戸ならではの創業伝説であるが、共通しているのは、いずれも製陶技術を外からもたらした者として顕彰されている点である。



加藤民吉像
所蔵：靈神社 写真提供：瀬戸市

瀬戸は千年余の伝統を保ちつつも、その画期において、外から人や技術・様式を受け入れてきた。また、古代の灰釉陶器からはじまるその歴史のなかで、中国陶磁やノベルティ、京焼、肥前磁器など海外や他産地の人気製品をモデルとし、時代の需要に応じ、優れた施釉陶磁器を生産してきた。こうした歴史が瀬戸焼の多様性を形成し、「瀬戸でつくれないものはない」とまで言われるようになった。この多様性こそ産地としての魅力であり、さまざまな個性を持ったツクリテを受け入れて育み、必要とする土や技術を提供しつづけてきた瀬戸の風土そのものである。2つの創業伝説は、まさにこの瀬戸焼の多様性を象徴している。



TOKONAME WARE

常滑焼

愛知県常滑市

面積：55.90km²

総人口：59,086人 ※平成31(2019)年1月現在

名産：窯業、米、菊、卵、キャベツ、イチゴ、イチジク、海苔、アサリ、酒、味噌、醤油ほか

「常＝床、地盤」「滑＝滑らか」が地名の由来といわれている。旧市街にはレンガ煙突が点在し、窯業で栄えた街並みが残る。常滑焼の即売市「常滑焼まつり」や、酒蔵開放、春の山車まつりには多くの観光客が訪れる。

愛知県常滑市
つくり手の息づくまち

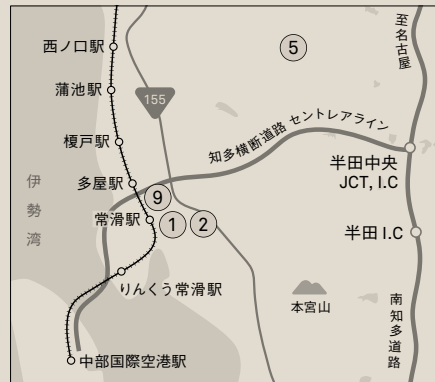
常滑市は愛知県知多半島のほぼ中央に位置する南北に細長い市で、西は伊勢湾に面し、東は丘陵地が続いています。気候は年間を通じて温暖で、適度な雨量もあります。豊かな恵みは、古くから窯業や漁業、農業などの産業を育ててきました。平成17(2005)年には中部国際空港が開港し、「やきものと空港のまち」としての独特な都市景観を形成しています。

常滑市域に連なる丘陵には、第三紀鮮新世後半(600~200万年前)に東海湖と呼ばれる堆積盆地の堆積物によって形成された常滑層群が存在しています。この常滑層群は今日まで常滑焼を続けることができた陶土の源泉ともいえます。

12世紀初頭からはじまったとされる中世常滑窯では、碗・皿類、壺・甕・鉢類を中心に瓦や陶硯、陶鍾、羽釜、五徳など多様なやきものを生産していました。戦後の大規模な開発工事などによって多くの古窯が消滅してしまいましたが、築かれた窯は3,000基以上も存在していたと考えられており、中世最大の生産量を誇っています。知多半島でつくられた無数のやきものは船を用いて全国へ運ばれ、北は東北、南は九州に至るまで広範囲に分布しています。江戸時代になると、急須や徳利などもつくられるようになり、明治・大正時代には、土管や衛生陶器、テラコッタ、タイルなどの建築陶器が盛んにつくられるようになっていきます。

日本遺産構成文化財

1. やきもの散歩道の文化的景観
2. 常滑の陶器の生産用具・製品
3. 登窯
4. 無形文化財 常滑焼の製作技術
5. 菟池古窯
6. 高坂古窯址群
7. 鯉江方寿翁家の墓
8. 窯のある広場・資料館
9. 旧瀧田家住宅



1 やきもの散歩道の文化的景観

土管や焼耐瓶を土留に再利用した景観を楽しむことができる散策路。

写真提供: 常滑市



2 常滑の陶器の生産用具・製品

とこなめ陶の森資料館で展示されている国指定重要有形民俗文化財。

写真提供: とこなめ陶の森



5 菟池古窯

平安時代末期に使用された^{あながま}釜窯で、山茶碗・壺・甕などが生産された。

写真提供: とこなめ陶の森



9 旧瀧田家住宅

江戸時代から明治時代にかけて活躍した廻船問屋瀧田家の邸宅。

写真提供: 常滑市

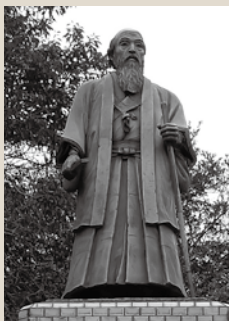
常滑焼の特徴



常滑 西小学校の陶壁 写真提供:とこなめ陶の森

常滑焼といえば、多くの人が明赤褐色のやきものを思い浮かべます。それらの代表的なやきものは急須、干支の置物などがあります。なかでも朱泥焼の急須は全国的に知られており、多くの茶人に愛されています。

常滑が全国に先駆けて朱泥を開発したのは江戸時代末期のことですが、もともとは壺や甕などの土味を生かした粘土を特徴としています。その理由は、常滑焼の土が鉄分を多く含み、低火度でも焼き締まりやすいことにあります。そのため、食器よりも壺や甕といった貯蔵用のやきものに適していました。

鯉江方寿翁の陶像
写真提供:とこなめ陶の森朱泥急須 三代 山田常山
所蔵:個人 写真提供:常滑市

窯



平安時代末期の「^{あながま}窯」は、斜面にトンネル状の穴を掘って築窯されています。壺や甕などの製品のほかに山茶碗や小皿なども生産されています。15世紀後半には、「大窯」が築かれ、壺・甕・鉢が主な製品となりました。江戸時代後期には、「連房式登窯」が瀬戸から導入され、高温焼成による甕類の大量生産がはじまりました。

檜場・御林古窯
写真提供:とこなめ陶の森

技法



平安時代末期から現在まで大型の壺や甕をつくる技術が受け継がれています。「ヨリコ」と呼ばれる直径が約10センチメートルの棒のように太い粘土紐を使って成形することから「ヨリコ造り」と呼ばれています。常滑のつくり手はロクロを使わずに、ヨリコを肩に担ぐようにして粘土を積み上げていくのが特徴です。つくり手は甕の周りをぐるぐると後ずさりするようにして、ヨリコを積み上げていきます。

ヨリコ造りの様子
写真提供:とこなめ陶の森

流通



知多半島は東西と南が海に面しています。窯が築かれた丘陵地と海の距離が近かったため、常滑焼は廻船を利用して効率良く日本各地に運ばれました。江戸時代から明治時代にかけて廻船業を営んでいた瀧田家は、常滑焼の出荷などにより伊勢湾周辺地域と大阪や江戸を結ぶなど、当時の人々の生活や経済を豊かにしました。

常滑港からの出荷の様子
写真提供:常滑市

常滑焼の歴史

常滑焼のはじまり

平安時代末期



自然釉猫描文大甕
所蔵・写真提供：とこなめ陶の森

常滑焼のはじまりは平安時代末期で、知多半島の丘陵地に窯が築かれました。粘土を焼き締めた山茶碗や小皿、鉢、壺、甕が主な生産品です。当時の窯は窖窯と呼ばれ、その数は知多半島全域でも3,000基以上とも言われています。

急須の登場

江戸時代後期



朱泥急須(江戸時代後期～末期)
所蔵：個人 写真提供：とこなめ陶の森

急須のはじまりは江戸時代後期です。安政元(1854)年には、朱泥急須が完成しました。昭和時代には、鑄込みを中心^いに、ろくろや手びねりなどの技法によっても急須がつくられています。その後、急須はどの家庭にもあるほどに私たちの生活に定着していきました。

貯蔵具として使われた壺や甕

平安時代末期～鎌倉時代



焼耐瓶 初代 伊奈長三
所蔵・写真提供：とこなめ陶の森

壺や甕は水に限らず、酒や油の貯蔵具としても使われます。ほかにも、経筒外容器や、被熱を受けた人骨が入った壺が発見されるなど、幅広い用途に使われていたことがわかります。これらは、廻船を利用して日本各地へ運ばれました。

近代土管の成立

明治時代初期

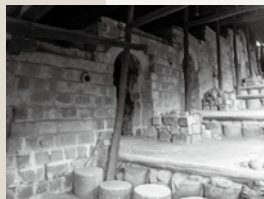


近代土管
所蔵・写真提供：とこなめ陶の森

鯉江方寿は、木型を用いた土管を発明しました。この土管が横浜の外国人居留地における下水道管や、鉄道の敷設時に採用されるなど、近代都市のインフラ整備には常滑焼の土管が大きく貢献しました。

時代と窯の変遷

室町時代～江戸時代



連房式登窯
写真提供：とこなめ陶の森

窖窯は15世紀後半に半地下式の大窯へと改良されたと考えられています。この時代の製品には白く濁った自然釉が掛かっています。江戸時代後期には、鯉江方寿^{こいえほうきゅう}・方寿親子^{ほうしゅ}が連房式登窯を導入し、高温焼成のやきものを大量生産できるようになりました。

建築陶器による装飾

大正時代



テラコッタ(「帝国ホテル日本館」)
所蔵：INAX ライブミュージアム 撮影：梶原敏英氏

大正12(1923)年に竣工した帝国ホテル(F.L.ライト設計)は、内外を大谷石と常滑焼のタイル・テラコッタが覆いました。タイルやテラコッタは、煉瓦と比べて軽く、地震の多い日本では、建築陶器として隆盛していくきっかけとなりました。

常滑焼の魅力、その可能性

常滑焼を生み出したまち

とこなめ陶の森 学芸員
小栗 康寛

常滑の人々が「常滑焼を代表するやきものや魅力とは何か」と聞かれたらどう答えるだろうか。おそらく、明快に断言できる人は少ない。

平安時代末期にはじまる常滑焼は、自然釉のたっぷり掛かる甕や三筋壺、茶の湯で取り合わされた水指、江戸時代にはじまる急須や酒器、明治時代から盛況する土管や火鉢、大正時代のテラコッタや衛生陶器、戦後は陶壁やオブジェ、ノベルティ、干支の置物、招き猫など多様なやきものをつくってきた産地であるが故に決めることは難しい。

「常滑」というまちを俯瞰してみると、いつの時代もそのときに求められるやきものをつくってきたともいえる。近代以前の甕は水や油の貯蔵だけでなく、醸造や藍染など暮らしを支えていく上で、身近であり、必要な道具であった。近代以降の建築陶器を中心に、見えない部分で人々の生活を支えている。

それと同時に、やきものが絶え間なく生産されてきた常滑の風景も陶の文脈のなかで考える必要がある。常滑のまちへ一步踏み出すと、まちを彩る陶の美しさや、居心地の良さ、つくり手の息づかいといった言葉では表すことのできない「やきものに接してきた人々の記憶」に触れることができる。今もやきものが仕事であるまちの空気を吸うことで、やきもの魅力を感じることができる。



いちき橋からみた常滑の風景(上:昭和時代・下:平成時代)

SHIGARAKI WARE

信
楽
焼

滋賀県甲賀市

面 積：481.62km²

総人口：90,942人 ※平成31(2019)年1月現在

名 産：窯業、薬、朝宮茶、土山茶ほか

古く甲賀は、「鹿深」「甲可」と書き、いずれも「カフカ」と呼称。信楽は、『正倉院文書』に「信楽」と表記されている。甲賀流忍者発祥の地。

滋賀県甲賀市 琵琶湖の恵みから生まれた産地

信楽焼の窯元を有する甲賀市は、滋賀県南部に位置し、大阪、名古屋から100キロメートル圏内にある交通の要衝。水源涵養や水質保全に重要な、琵琶湖の源流を保持しています。そのなかにある信楽では、13世紀頃、常滑の影響を受けて開窯しましたが、産地としての土壌は約6,500万年前、信楽陶土の母岩となる花崗岩が山地に広がりました。そして、約400万年前に、現在の伊賀付近には、かつて琵琶湖の原型となる古代湖があり、約40万年前に現在の位置まで北上したと言われています。湖底には土砂や動植物の残骸などが堆積した古琵琶湖層があり、そこへ花崗岩や流紋岩の風化物が流れ込んで、やきものに適した粘土質が出来上がりました。また、信楽は四方を山に囲まれた土地ですが、山越えや峠越えを経て、近辺の宇治や大阪、伊賀へとやきものを運ぶことができました。特に16世紀より、当時列島最大級の消費都市・京都に最も近い利点を生かし、やきものの供給を行うことで、産地として興盛していったことも大きな特徴です。戦国時代には茶の湯の道具として用いられたほか、近代以降は茶器に限らずタイルや植木鉢、たぬきの置物など、あらゆるやきものを製作。「形になるものは何でもつくる」という伝統と創造が共存するたくましい産地で、今まで消費者のニーズに合わせて多様な製品を生産してきました。

日本遺産構成文化財

1. 信楽焼窯跡群
2. 信楽焼
3. 古信楽
4. 江戸時代の信楽焼
5. 近代信楽焼製品
6. 岡本太郎作品
7. 古琵琶湖層
8. 信楽たぬき
9. 窯元散策路
10. 信楽火まつり(新宮神社)
11. 陶器市(信楽陶器まつり)



古信楽

3

室町時代後期、茶壺、蹲うすくまる、鬼桶水指が塚・奈良・京都などの町衆に茶陶として評価された。



古琵琶湖層

7

約400万年前に誕生した古代湖の底に堆積した層。やきものに良質の土を採取できる。



信楽火まつり(新宮神社)

10

やきものを焼く火に感謝し、松明を担いで、愛宕山山上の愛宕神社に奉納する祭り。



陶器市(信楽陶器まつり)

11

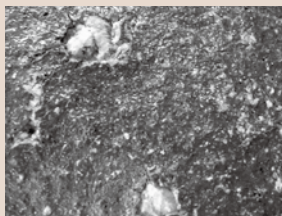
毎年10月開催の陶器市。信楽焼の肌触りを味わえるほか、甲賀市の物産展も同時開催。

信楽焼の特徴



檜垣文壺（室町時代中期）
所蔵：滋賀県立陶芸の森陶芸館

釉薬を施さずに約1,200～1,300度の高温で焼き締めます。長石や珪石を含んだ素地が明るい赤褐色に焼き上がる火色（緑色）は信楽焼の最大の魅力です。窯の火回りにより、変化が生まれた焼き肌には無限の美しさがあります。降灰による淡緑色の自然釉と釉溜まりの「蜻蛉の目」がさらに美しい景色を添えます。壺の肩には檜垣文が施されることも。土に含まれた長石が溶け、白いガラス状の粒となって土の表面に出た「蟹の目」や「霰」、珪石が土中から顔をのぞかせた「石ハゼ」も魅力のひとつです。



石ハゼ
提供：滋賀県立陶芸の森



罍（室町時代中期）
所蔵：滋賀県立陶芸の森陶芸館



技法



信楽山地の母岩は花崗岩です。約400万年前には、現在の伊賀付近に琵琶湖の原型となる古代湖があり、約40万年前に現在の位置まで北上する間に、湖底には土砂や動植物の残骸などが堆積し、古琵琶湖層が形成され、さらに花崗岩や流紋岩の風化物が流れ込み、やきものに適した粘土質の陶土が出来上がりました。ざっくりとした肌合いの焼締だけでなく、施釉や大物づくりに適した汎用性の高い陶土です。

信楽焼の代表的な技法は中世にはじまる大物づくりと、江戸時代以降に成立した小物づくりがあります。大物づくりは粘土紐をねりつけて成形します。適度に乾燥させた後、上に積み上げる「くったて」と、別々に作りひっくり返して接合する「わんつぎ」の技法が特徴です。小物づくりは水びき口クロで成形します。



大物づくり作陶（1970年頃）
撮影：ルイス・コート氏

焼成



燃料は松の薪を uses。中世はあながま窖窯でしたが、江戸時代になると連房式登窯が導入されます。戦後は火鉢景気に沸き、大物を窯詰めするため焼成室は広くつくられました。昭和30年代以降、重油窯が導入され、後に普及したガス窯、電気窯が現在は中心です。主に焼締陶を追究するづくり手は、薪を燃料とする窯を使います。



金山遺跡（窯跡）1号窯
写真：「金山遺跡」より転載

信楽焼の歴史

信楽焼のはじまり

鎌倉・室町時代

鎌倉時代中期に開窯した信楽焼は常滑焼の技術的な影響を受けて生産がはじまりました。14世紀に入ると窯構造は発展し、製品も独自の方向性がみられるように。山間の陸路を通じて徐々に商圏を広げ、15世紀後半には京都へと進出していきました。



長禄2年鉄鉢・壺
所蔵：信楽窯業技術試験場 撮影：KENSE

火鉢景気と近代日本のものづくり

近代

明治時代になり金属製品の導入や他産地との競合により不振に陥りました。不況のなか、糸取鍋は製糸業の発展とともに需要を伸ばし、化学工業用の耐酸陶器や汽車土瓶の生産が軌道に乗りました。また海鼠釉なまこの製法が解明され、戦後は火鉢景気に沸きました。



火鉢が積み上がる
写真：「甲賀市史5巻」より転載

茶陶信楽

室町・戦国時代

戦国時代の茶会記にみえる信楽焼としては水指・建水・茶碗・茶壺などがあります。堺の茶人津田宗及そうきゅうは、京都の辻玄哉げんさい所持の鬼桶水指を銀百貫文で購入しました。また『茶具備討集』の茶壺の項目には「滋賀楽壺」があがるなど、茶陶信楽は珍重されました。



鬼桶水指 銘 紅かのこ
所蔵：滋賀県立陶芸の森陶芸館

信楽たぬき

近代

信楽たぬきが全国区となった理由は、専門に焼く腕の良い陶工が活躍したこと、昭和天皇の行幸の際に沿道に日の丸の旗を持たせた信楽たぬきを並べて歓迎した様子が報道されたこと、また石田豪澄が詠んだ「狸の八相縁起」とともに広まったと言われています。



奉迎の狸
写真：信楽町「天皇陛下行幸記念」1951年より転載

登窯導入と施釉陶器の焼成

江戸時代

江戸時代に入り登窯が導入されると、施釉陶器が焼成されはじめます。鉄釉と白釉を上下に掛け分けた腰白茶壺のほか、18世紀中頃以降には、京焼の影響を受けて小物づくりがはじまり、小杉碗や神仏器、土瓶がつくられるようになりました。



滋賀県立安土城考古博物館「大信楽焼展」
所蔵：甲賀市 写真：「甲賀市史5巻」より転載

産業と芸術の調和と展開

現代

昭和30年代、つくり手が古信楽の再現に取り組みようになります。昭和40年代は岡本太郎の《太陽の塔》の裏の顔が制作されるなど、芸術家が信楽を訪れるようになり、陶芸家が活躍するようになりました。現在の信楽は技術力と芸術性を両輪にして発展しています。



調和の広場
写真提供：大阪府

信楽焼の魅力、その可能性

信楽の土はスゴイ！

滋賀県立陶芸の森 専門学芸員

大槻 倫子

信楽でやきものが焼かれるようになった要因はいくつかあるが、やはり良質の土が採れることがあげられる。信楽の原土は花崗岩が風化して粘土化したもので「蛙目粘土」^{がいろめ}「木節粘土」^{きぶし}「実土粘土」^{みづち}などがあり、それぞれ性質が異なる。信楽焼に用いられてきた土は、長石や珪石粒をやや多量に含み、鉄分が少ない白土である。粘り気があり伸びが良く可塑性^{かそせい}(形が自由に変化する性質)に富むことから成形しやすい。適度な耐火度があり、焼くとざっくりとした温かみのある質感が生まれるのも魅力だ。信楽の焼締の独特の風合いは信楽の土でしか生み出せないのである。また精製すると薄づくりにも向いている。このため信楽焼は大物から小物まで時代に合わせたさまざまなやきものを生み出してきたのだ。

江戸時代に活躍した京焼の名工・乾山(1663-1743年)の技法書『陶工必用』には信楽土の使用についての記録があり、江戸時代の京焼でも信楽土を混ぜて用いていたことが知られている。また、かの北大路魯山人(1883-1959年)も信楽土を好んだひとりである。ざっくりとした質感、焼成すると赤みが出る特徴を好み、織部や志野など多くの素地に信楽土を混ぜて使っていたという。

信楽の良質の粘土は、信楽焼はもちろんのこと、他地のやきものをも陰ながら支えてきたスゴイ土なのである。



TAMBA WARE

丹波焼

兵庫県篠山市

面積：377.59 km²

総人口：41,760人 ※平成31(2019)年1月現在

名産：窯業、丹波篠山黒豆、丹波篠山山の芋、丹波栗、丹波松茸、丹波茶、丹波木綿など

慶長14(1609)年、徳川家康の命により、天下普請で篠山城が築かれたことが地名の由来。秋から冬にかけて丹波霧と言われる霧が農産物に好影響を与える。民謡デカンショ節のふるさと。

※2019年5月1日に篠山市は「丹波篠山市」へ市名変更します

三 国 の 国 境 に 生 ま れ た 窯 業 地
兵 庫 県 篠 山 市

丹波焼のふるさとである立杭^{たちくい}は、兵庫県篠山市今田町^{こんだ}に所在します。古代の国名でいうと、丹波国ですが、西は播磨に、南は摂津と接し、ちょうど三国の国境にあたります。この辺りを含む、播磨国から丹波国にかけての広大な山地は、古代は摂津の住吉大社の領地でした。領地であることを示すために丹波・播磨の国境に梅の木が植えられて、これを「立杭」と呼んだことが、地名の由来だとも伝えられています。

篠山市今田町に接する北摂の三田市は、古代より須恵器の一大生産地であったとして知られています。立杭で丹波焼が生産されるより以前から窯業が盛んであったことから、その後の丹波焼の成立に多大な影響を与えたことが想像できます。丹波焼は、およそ800年前に三本峠周辺で焼きはじめられ、やがて中世の^{あながま}窖窯時代を経て、近世に登窯の時代となり大量生産が可能になると、播鉢^{かめ}などの製品が江戸やその他の地域に搬出されるようになります。その後も、江戸時代を通じて、壺や甕、鉢、徳利などの生活雑器が生産され、近代から現代にいたるまで、その時々^{かめ}に求められた製品をつくり続けてきました。

緑豊かな里山は、今も歴史の面影を残し、中世から続く全国でも数少ない窯業地として伝統を受け継いだ60軒ほどの窯元が、新しい作品を生み出し続けています。

日本遺産構成文化財

1. 丹波立杭焼
2. 丹波焼古窯跡
3. 丹波立杭登窯
4. 丹波立杭焼(作業技法)
5. 古丹波コレクション



丹波焼古窯跡

2

三本峠周辺は丹波焼発祥の地とされる。写真は兵庫県指定史跡の源兵衛山窯跡。



丹波立杭登窯

3

明治28(1895)年築窯といわれる現存最古の丹波焼の登窯。(兵庫県指定重要有形民俗文化財)



丹波立杭焼(作業技法)

4

国の記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された無形文化財に指定されている。



古丹波コレクション

5

丹波古陶館所蔵の草創期から江戸時代末期の312点のコレクション。

壺「寛長拾八年二月吉日 上吉右衛門 源十郎一刻」
慶長一八二六・一八三三年
所蔵 丹波古陶館

丹波焼の特徴



兵庫県指定重要有形民俗文化財の丹波立杭登窯（平成5年頃）

丹波焼は、一般的には茶色の焼締陶器のイメージですが、実際にはさまざまな釉薬が使われています。中世の丹波焼は、窯の中で薪の灰が降りかかり、溶けて緑色に変化した自然釉がみどころのひとつです。江戸時代には、灰釉だけでなく、鉄分の多い化粧土で焼成し、美しく発色した赤土部や、赤土部を精製してつくった鉄釉の一種の栗皮釉、白い化粧土をかけた白丹波など、素晴らしい色合いが生まれました。丹波焼は、素朴で親しみやすく、壺、甕、播鉢のほか、德利、皿、井、鉢、花瓶、茶道具など、その時々に応じた多種多様な製品が生産されています。



黒釉傘德利 花遊印（江戸時代末期）
所蔵：丹波古陶館



灰釉束柴形桶（江戸時代初期）
所蔵：丹波古陶館

原材料



丹波焼の土は、中世は立杭周辺の山土が用いられたと考えられており、江戸時代以前からいまの三田市西相野周辺より採掘されていたことが、文禄3(1594)年の土取場絵図などの文献資料からうかがい知ることができます。現在は、三田市四ツ辻の山土と篠山市弁天地区の田土を採土したものを坯土はいど工場で混合した原土が使用されています。



坯土工場

技法



古来より、丹波焼の形づくりは、紐状にした粘土を積み上げていく紐づくりが基本です。小物であっても紐づくりで、ロクロに置く土は、やきもの一個分のみという一品づくりでした。江戸時代末期には、周辺の磁器生産から影響を受けた板づくりや、昭和初期には、石膏型に粘土を押し当てる型づくりによる成型技法なども用いられています。また装飾技法として、木葉を貼り付けた葉文、釘彫文や貼付け文などがあります。



ロクロ成形技法

窯



丹波焼の登窯は、山の斜面を利用して築かれた、約50メートルにおよぶ長大な窯です。10室ほどの袋と呼ばれる焼成室があり、幅は約1.5メートル、高さは約1メートルの細長い窯で、その形状から蛇釜じゃがまともいいます。特徴は、①床面が階段状ではなく、スロープ状になっている、②横から薪をくべる穴があり、焼成室が壁で分かれているのではなく土柱で仕切られている、③煙出し部分は、レンガで市松模様のように築かれており、その形から蜂の巣と呼ばれている、などがあげられます。



蜂の巣（排煙部）

丹波焼の歴史

丹波焼のはじまり

平安時代末期～鎌倉時代

三筋壺(平安時代末期)
所蔵:丹波古陶館

最古の窯のひとつである三本峠北窯跡の発掘調査では、菊花文などの壺片と常滑焼に似た甕片が出土しました。このことから、丹波焼の成立には、古代以来の須恵器生産の技術を基盤に、東海地方の窯業技術を受け入れ成立したと考えられています。

赤土部の時代

江戸時代前半

赤土部釉窯変油壺 吉兵衛
(江戸時代初期)
所蔵:丹波古陶館

赤土部とは、鉄分を多く含む塗土で、水漏れ防止のために用いられていましたが、まもなく、器面を赤褐色に彩る化粧土として用いられるようになりました。この時期に赤土部と釘彫り、葉文などの装飾技法を組み合わせた豊かな器面装飾が開花しました。

独自性の確立

鎌倉時代～室町時代

大壺(鎌倉時代)
所蔵:丹波古陶館

東海地方の強い影響を受け成立した丹波焼は、室町時代に入ると、丹波独自の作風を確立します。赤褐色の作品が多くなり、その背景には焼成技術の向上がうかがえます。明るい赤褐色の地肌に、自然釉が流れ落ちる様は、中世丹波焼の代表的な姿です。

色絵陶器の出現

江戸時代後半

色絵蒔文燭燭徳利 一此印
(江戸時代末期)
所蔵:丹波古陶館

篠山城近くではじまった王地山窯は磁器を焼成し、その影響で丹波でも色絵磁器や染付磁器を模倣した作品が作られるようになります。精緻な薄手の器肌に、白土の化粧土と透明釉を掛け絵付けが施された、いわゆる「白丹波」と呼ばれる作品がその代表です。

中世から近世へ

桃山時代～江戸時代初頭

灰釉四耳大壺
「たんはおのはらけんわ十年 きへのね
つばや久左衛門」刻 元和10(1624)年
所蔵:丹波古陶館

江戸時代に入ると、自然釉から人工的に釉薬を施した施釉陶器へ変化します。近世丹波焼のはじまりです。代表的なものに茶壺があります。丹波の名産として、唐物茶壺に類似したもので丹波独自の形のものまで、さまざまなものが生産されました。

丹波の復興

現代



明治以降、色絵陶器の生産は減少し、酒・醤油の徳利や樽型容器などが生産され、昭和初期には民藝運動の柳宗悦により、丹波焼の素朴さと実用性が再評価されました。戦後の低迷期を経て、昭和53(1978)年に丹波立杭焼が国の伝統的工芸品の指定を受けました。

丹波焼の魅力、その可能性

頑なに受け継がれた丹波窯

篠山市地域コミュニティ課
課長補佐(元今田町文化財担当)
河野 克人

織豊時代から江戸時代へと変わった慶長年間頃、新たな作窯の技術がもたらされた。下立杭に最初の登窯跡が発見されている。十分な発掘調査ができていないため、構造は明確でないが、窯の長さ52メートル、焼成室の幅は約1.6メートルで、窯の規模としては現在と変わらなかったようである。江戸時代には座方による経営が行われ、

一時期、庄屋の園田家が経営した頃の文書が残されている。嘉永5(1852)年に記された「多紀郡明細帳」(関西大学蔵)からは、上立杭村に3基、下立杭村に4基、釜屋村に3基あったことがわ



「上立杭村見取図」(部分)

かる。また、明治6(1873)年の「上立杭村見取図」、「下立杭村見取図」、「立杭村乃内釜屋分」(篠山市立歴史美術館蔵)には地図上にそれぞれの窯の位置が記されており、先の明細帳の記述と合致している。これらの窯はその後も使われていたことから、窯は江戸時代後期には現在と同じ形状をしていたと考えられる。共同経営の窯から個人経営の窯となった今でも、基本的な構造は変わらない。伝統的な作窯技術が頑なに受け継がれているのである。丹波焼の登窯は、他の産地にはない独特の形状をしており、その作窯技法が国の記録作成等の措置を講ずべきものとして選択された無形文化財になっている。



BIZEN WARE

備
前
焼

岡山県備前市

面積：258.14 km²

総人口：34,671人 ※平成31(2019)年1月現在

名産：窯業、備前カレー、イチジク、焼アナゴ、マス
カット、カキオコ(牡蠣のお好み焼き)、牡蠣

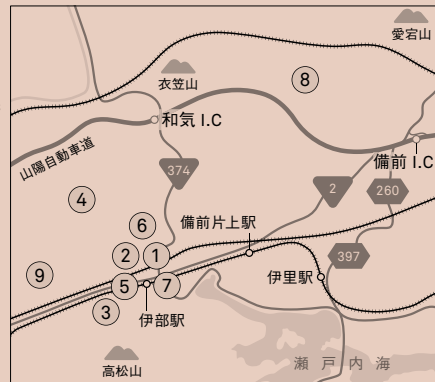
昭和26(1951)年に伊部町と片上町が合併し、備前町となったのが由来。近代以降は三石、片上地区が全国でも有数の耐火煉瓦の生産地だった。公立としては世界最古の庶民教育学校とも呼べる、旧関谷学校が現存し、楷の木のシーズンには多くの観光客で賑わう。

豊かな山々と瀬戸内海に育まれた産地 岡山県備前市

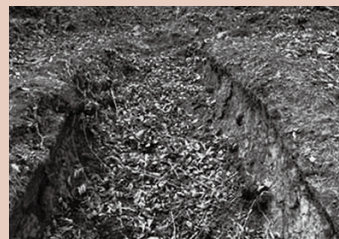
岡山県の南東部に位置する備前市は、瀬戸内海に面した温暖な気候で、岡山県三大河川のひとつである吉井川と、山口から畿内へ至る山陽道が交差する、物流の点でも優れた地域。この土地で生まれた備前焼は、平安時代末に熊山の麓で碗や皿、瓦などを生産しはじめたことが起源とされています。また、備前市の西部、流紋岩でできた不老山、医王山、かやはら榎原山に挟まれる伊部地区で、山々から流出した山土の一部が堆積した「ひよせ干寄」と呼ばれる良質な土を入手できたことも、やきものが営々と焼かれた背景のひとつでしょう。初期の備前焼は熊山の山中で焼かれていましたが、備前焼の人気にともない窯の大型化や運搬の利便性をとって里へ降り築窯。安土桃山時代には、備前焼の陶工たちによって指導されたとみられるやきものが、加賀、豊岡、丹波篠山、舞鶴、柳井でつくられており、その後に備前焼の形を模した製品が出回るようになります。このことから、当時すでに備前焼としてのブランドが確立されていたことがわかります。また江戸時代に入ると、岡山藩主・池田光政によって燃料や材料が下げ渡され、名工が「御細工人」に任じられるなど、藩も備前焼の発展に力を入れていました。天保2(1831)年、備前ではじめての連房式登窯が開窯され、その後も改築を繰り返しながら昭和15(1940) - 昭和16(1941)年頃まで使用されていたと言われています。

日本遺産構成文化財

1. 焼物の里の文化的景観
2. 備前焼の焼成技術
3. 無形文化財 備前焼の製作技術
4. 備前焼熊山古窯跡群
5. 備前陶器窯跡「伊部南大窯跡」「伊部北大窯跡」「伊部西大窯跡」
6. 小幡山 長法寺・天津神社
7. 備前焼狛犬
8. 旧関谷学校
9. 備前焼まつり



3 無形文化財 備前焼の製作技術
高度成長期「備前焼中興の祖」かかしげとうろう金重陶陽が人間国宝になり多くの作家が生まれた。



4 備前焼熊山古窯跡群
伊部の北、熊山山中に点在する窯跡群で、鎌倉時代から室町時代のもの17基が市指定史跡に。



8 旧関谷学校
岡山藩主・池田光政による日本最古の公立学校。約5万枚の備前焼の瓦が使用されている。



9 備前焼まつり
備前焼のまち・伊部で、毎年10月第3日曜日とその前日の土曜日開催。

備前焼の特徴



南大窯全景上空写真

6世紀頃より瀬戸内市内の^{おく}邑久古窯跡群で連綿とつくられていた須恵器の生産が終わる平安時代後期、それに呼応するかのよう^{よう}に伊部地域で生産が開始されるのが備前焼です。中世後半、播鉢などの堅牢さが多くの需要を生み、さらには安土桃山時代、焼締による素朴で簡素な風合いが茶人に好まれました。釉薬を使わないこと^{ようへん}によって器表に表れるさまざまな「窯変」は、現在まで多くの愛好家を生んでいます。生産地備前は、市域総面積の2/3が山地です。その地質は流紋岩や石英斑岩などで構成されています。流紋岩は、花崗岩地域に比べて樹木が再生しや



小皿も重ね焼き(平安時代末期)



ストックされている備前焼を焼く田土(ひよせ)

すく、燃料になるアカマツ林が広く発達するという特徴があります。その流紋岩から生成される山土(粘土)や平野部下層に堆積した^{たつち}田土が備前焼の原料となり、独特の味わいを器表に描き出します。室町時代に流通した大甕は、棒状の粘土を積み上げて成形したもので、堅牢な容器として液体を貯蔵するのに適し、山城や寺などで多量に消費されました。重ねて焼成するのに堅緻に焼き締まる播鉢は、穀物を粉にする粉食の食生活に適するなど、用具として抜群の機能性を持っていました。播鉢、壺、甕の需要が縮小した江戸時代以降では、宮獅子、布袋・恵比須などの置物を



どべ鉢で粘土の水分を抜く



熊山山中の松



高さ1.5メートルの宇佐八幡宮備前焼宮獅子阿形(日本遺産認定時)

型で多量につくる技術を特化させ、近代以降は陶芸家・金重陶陽によって復興された桃山陶が調度品として愛好され、昭和バブル期の威信財(持つことに価値を見出す)として、マーケット規模が一気に拡大。しかし、常に隆盛ではなく、時代によって浮き沈みはありました。現在、伊部地域では、平安から明治時代にかけての、100ヶ所以上の窯跡が確認されています。

備前焼の歴史

備前焼のはじまり

平安時代末期



医王山東麓2号窯跡

伊部平野部の山裾・中腹にて、全長10メートル前後の^{あながま}窰で、甕、椀、小皿、播り目のない鉢、瓦を焼いたのが備前焼のはじまりです。今の赤褐色とは違って、須恵器の灰色のような色合いのものが多く焼成されました。東播磨、西播磨の影響も受けたとも言われています。

集約される生産の場

室町時代末期



伊部西大窰跡上空から伊部南大窰跡を見る

窰場が3ヶ所に集約され、組織化した生産がされるようになります。樫原山北側山裾、不老山の南山裾、医王山の東山裾、それぞれの窰場は現在、伊部南大窰、伊部北大窰、伊部西大窰と呼ばれ、国指定史跡「備前陶器窰跡」として一体的に保護されています。

西日本への流通

鎌倉時代末期



医王山東麓1号窯跡

器表が赤褐色になるにつれ、窰も大型化、西日本各地に流通しはじめます。鉢は播り目のあるものが主流になります。壺、甕とともに、播鉢は当時の粉食に対応した調理用具として生産量が拡大していきます。標高400メートルを超える場所でも窰跡が見つかっています。

茶の湯に重用される

安土桃山時代



出土した辣蕈型の德利

釉薬を使わない器表の枯淡の風合が、多くの茶人に好まれました。茶事では、南蛮などの写しとして、華やかな世相とは対照的なやきものとして、信楽焼とともに、早くから用いられました。天下人秀吉も、備前焼の大甕に眠っているとされています。

大量生産されるやきもの

室町時代



不老山東口窰跡から出土した播鉢

平野部の山裾近くに30メートルを超えるような窰を築き、播鉢などを大量に生産。西日本の遺跡では、必ず見つかるというほど、流通していました。昭和43(1968)年に調査された不老山東口窰跡では、ひとつの窰跡で天箱1,700箱分の播鉢・壺片が出土しています。

融通窰で技術革新

江戸時代末期



市指定建造物天保窰

この頃、連房式登窰(当時は融通窰と呼ばれる)を3基導入。大窰の非効率に対して、コスト重視の窰で、3基のうち1基は昭和16(1941)年頃まで使用されました。生産された角德利、人形德利は、^{とも}鶴(広島県福山市)の保命酒の容器として大量に用いられています。

備前焼の魅力、その可能性

備前大窯の行方

備前市教育委員会文化振興課 参事
石井 啓

伊部南大窯の前に立つ。小高い山が数ヶ所眼前に迫る。視点を合わせると、それは膨大な陶器の破片だということがわかる。山と山の間には、凹んだところがあり、それが窯だろうと推測する。凹みの前面に立ち、その長軸をすべて視界に入れるため引いてみると、凹みの長さは50メートルを超えそうである。大窯である。筆者は、平成12(2000)年頃から10年ほど、この窯跡の発掘調査担当者だった。昭和18(1943)年頃、先学によって部分的に調査され、その後も詳細な地形測量が行われた。その成果は報告書等によって知ることができる。2000年頃、新たな調査に着手した経緯はさまざまあるが、この膨大な陶片の山、長大と思われる窯跡、隔絶された感覚に潰されそうにもなった。発掘調査によって東側の窯は、全長53.8メートル、最大幅5.5メートル、中軸線状に30数本以上の土の柱を配置し天井を支える特異な単室の構造だと判明。膨大な陶片の山も、5メートルほど掘り下げたが、崩落危険のため中止した。事前の地中レーダーでは、深さが10数メートルにも及ぶという。今、やっと、窯跡群の整備計画が着手されている。発掘調査がはじまって20年弱。巨大な窯跡をどうするか、今を生きるヒトが、真摯に、20年後を想像して、作業を進める時がきている。大窯の行方に向けて、話し合い、さまざまな案を出し合う、そして何かを生み出そうとする、そういう思いこそ大切にしたい。



参考文献リスト

[p.10- 越前焼]

- ・出光美術館『越前古窯とその再現 ― 九右衛門窯の記録』1994年
- ・越前町教育委員会『越前町織田史(古代・中世編)』越前町、2006年
- ・越前町教育委員会『海は語る ふくいの歴史を足元から探る』2013年
- ・越前町教育委員会『幕末明治の越前町』2018年
- ・越前焼 たいら窯工房調査会『越前焼 たいら窯 工房調査報告書』越前町教育委員会・福井県陶芸館・越前焼 たいら窯工房調査会、2017年
- ・織田町歴史資料館『織田ころの里 わざの里 織田町歴史資料館 常設展示図録』2001年
- ・福井県教育庁埋蔵文化財調査センター『越前焼総合調査事業報告』2016年
- ・福井県窯業誌刊行会『福井県窯業誌』1983年
- ・水野九右衛門『時代別 古越前名品図録』光美術工芸株式会社、1975年

[p.20- 瀬戸焼]

- ・愛知県『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』2008年
- ・愛知県陶磁資料館・瀬戸市の陶芸―1300年の歴史と今』1995年
- ・大せともの祭協賛会『瀬戸焼―三〇〇年の伝統と技術』1999年
- ・陶祖800年祭実行委員会『瀬戸焼ハンドブック』2014年
- ・瀬戸市『瀬戸市史 陶磁史編一』[「上代から中世まで」]1969年
- ・瀬戸市『瀬戸市史 陶磁史編二』[「陶窯の変遷・加藤四郎左衛門景正(藤四郎)の資料」]1981年
- ・瀬戸市『瀬戸市史 陶磁史編三』[「瀬戸の染付焼」]1967年
- ・瀬戸市『瀬戸市史 陶磁史編四』[「瀬戸大窯の時代」]1993年
- ・瀬戸市『瀬戸市史 陶磁史編五』[「瀬戸の本業焼」]1993年
- ・瀬戸市『瀬戸市史 陶磁史編六』[「近世瀬戸焼の生産と流通」]1998年

[p.30- 常滑焼]

- ・愛知県『愛知県史 別編 窯業 3 中世・近世常滑系』2012年
- ・赤羽一郎『常滑焼 ― 中世窯の様相 ―』1984年
- ・赤羽一郎『常滑 陶芸の歴史と技法』1983年
- ・INAXライブミュージアム『日本のテラコッタ建築 昭和・震災復興期の装飾』2012年
- ・INAXライブミュージアム企画委員会『やきものを積んだ街かど 再利用のデザイン』2011年
- ・常滑町青年会『常滑陶器誌』1912年
- ・常滑青年会議所記念誌編集室『やきものふるさとこなめ』1977年
- ・中野晴久 愛知学院大学博士(文学) 論文『中世常滑窯の研究』2013年
- ・永原慶二『常滑焼と中世社会』1995年
- ・三上次男、楢崎彰一『日本の考古学 VI 歴史時代(上)』1967年
- ・MIHO MUSEUM『古陶の譜 中世のやきもの ― 六古窯とその周辺 ―』2010年
- ・吉田弘『常滑焼の開拓者 鯉江方寿の生涯』1987年

[p.40- 信楽焼]

- ・大槻倫子『窯別ガイド日本のやきもの 信楽・伊賀』2003年
- ・甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史』第1巻「古代の甲賀」甲賀市、2007年
- ・甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史』第2巻「甲賀衆の中世」甲賀市、2012年
- ・甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史』第3巻「道・町・村の江戸時代」甲賀市、2014年
- ・甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史』第4巻「明日の甲賀への歩み」甲賀市、2015年
- ・甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史』第5巻「信楽焼・考古・美術工芸」甲賀市、2013年
- ・甲賀市史編さん委員会編『甲賀市史』第8巻「甲賀市事典」甲賀市、2016年
- ・滋賀県教育委員会事務局文化財保護課編『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う発掘調査報告書 金山遺跡』2003年

- ・富増純一『絵で見る信楽焼 温故知新』2002年
- ・畑中英二『岡本太郎、信楽へー信楽焼の近代とその遺産ー』2015年
- ・平野敏三『信楽 陶芸の歴史と技法』1982年

[p.50- 丹波焼]

- ・大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター『近世丹波焼の研究』[「大手前大学 史学研究所オープン・リサーチ・センター 研究報告第3号」]2007年
- ・グループ窯『丹波焼 作り手から使い手へ』2007年
- ・今田町教育委員会『丹波焼 遺跡探査による埋蔵文化財調査報告書』[「今田町文化財調査報告書 第6集」]1999年
- ・篠山市教育委員会『三本峠北・南窯跡―丹波焼窯跡範囲確認調査概要報告書―』[「篠山市文化財資料 第1集」]2000年
- ・篠山市教育委員会『下立杭古窯跡範囲確認調査概要報告書 平成15年度 市内遺跡発掘調査概要報告書』[「篠山市文化財資料 第7集」]2004年
- ・丹波古陶館『古丹波名品集』1989年
- ・兵庫陶芸美術館『やきものふるさと丹波―一名品でたどる800年のあゆみ―』2005年
- ・兵庫陶芸美術館『Made in TAMBA 丹波の里のやきものづくり 丹波焼ガイドブック』2009年
- ・兵庫陶芸美術館『THE TAMBA(秋)』2015年

[p.60- 備前焼]

- ・伊藤晃『岡山県の考古学』[「窯業」]吉川弘文館、1987年
- ・河本清・葛原克人『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』[「不老山古備前窯址」岡山県文化財保護協会、1972年
- ・備前市教育委員会『国指定史跡伊部南大窯跡発掘調査報告書』[「備前市埋蔵文化財調査報告書8」]2008年
- ・間壁忠彦『考古学ライブラリー備前焼』ニュー・サイエンス社、1997年
- ・間壁忠彦・間壁霞子『備前焼研究 ノート(1)~(4)』[「倉敷考古館研究集報」]1・2・5・18、1966年・1968年・1984年

執筆一覧

[p.10- 越前焼]	[p.40- 信楽焼]
p.10-13 越前町商工観光課	p.40-43,49 甲賀市商工労政課
p.14-15,18-19 一瀬 諒	p.44-47 永井 晃子
(福井県立越前古窯博物館)	(甲賀市教育委員会)
p.16-17 村上 雅紀(越前町織田文化歴史館)	p.48 大槻 倫子(滋賀県立陶芸の森陶芸館)
p.18-19 小辻 陽子(越前町織田文化歴史館)	
[p.20- 瀬戸焼]	[p.50- 丹波焼]
p.20-23 瀬戸市ものづくり商業振興課	p.50-51 篠山市商工観光課
p.24-28 服部 郁(瀬戸市文化課)	p.52-55, 58 河野 克人
	(篠山市地域コミュニティ課)
	p.56-57 松岡 千寿(兵庫県立考古博物館)
[p.30- 常滑焼]	[p.60- 備前焼]
p.30-37 常滑市商工観光課	p.60-63 備前市産業観光課
p.38 小栗 康寛(こなめ陶の森)	p.64-68 石井 啓(備前市教育委員会)

六古窯を美術の視点で見る

中世の壺と瓶 — 「宝瓶」としてのイメージ

学習院大学文学部 教授
荒川 正明

私はこの拙稿のなかで、中世陶器の壺や瓶に、仏教美術でいわれる「宝瓶」のイメージを読み取りたいと思う。では「宝瓶」とはいったい何か。「宝瓶」の源流を辿ってみると、少なくとも4～6世紀頃のインド・グプタ朝彫刻などに見られる瓶にまで遡る。これは生命の根源となる聖水をたたえた瓶で、あらゆるものを生み出すエネルギーの源とされるものだ。

「宝瓶」はインドから中国に東伝、北魏時代の龍門石窟などに彫られ、瓶からは蓮が生え渦巻き状の唐草になり、蓮花から新たな仏が誕生する（蓮華化生）。要するに、「宝瓶」は生命の根源としての水、そして蓮は豊穡多産をそれぞれ象徴するのである。さらに、「宝瓶」のイメージは仏教とともに日本へも伝播し、例えば、飛鳥時代の「百済観音」（法隆寺蔵）の持つ水瓶のように、衆生を救う観音さまの持物ともなる。私はこの古代の「宝瓶」のイメージが、中世陶器の壺や瓶にも流れ込んでいると考えている。

さて、平安時代後期、つまり日本の中世陶器の萌芽期における壺や瓶など袋物製品の流行の背景を考える上で、法華経信仰の在り方をみていく必要があるだろう。それは、法華経の經典には「写経・造塔・造仏といった行いは功德が絶大であり、人々の悟りに直接結びつく」という思想が語られていたからである。

仏事に力を注ぎ込むことは善行である、という理論的根拠が法華経によって与えられ、いわば芸術至上主義のような造形活動が「善行」として社会から評価された。法華経を紐解いてみると、浄土ともされる仏国土での「宝瓶」に関する記述が認められるのである。「薬王菩薩本事品第二十三」のなかでは、以下のことが記されている。つまり仏の国には「宝瓶」と香炉が満ちていること。さらには、仏の

舍利を納めるために八万四千の塔と、同じ数の「宝瓶」が求められたことである。

中世窯が勃興した院政期、愛染王法という秘密修法に活かされた「愛染明王図」*1のなかに、「宝瓶」が盛んに描かれている。ほとんどの愛染明王は、じつは「宝瓶」から生まれ出ているのである。そして、愛染明王を生んだ「宝瓶」の口からは、他にも宝珠や巻貝などの宝物が、次々に溢れ出ている。南北朝時代のこの版本「愛染明王図」の場合、「宝瓶」が梅瓶(瓶子)形を成している点も興味深い。

ところで、中世の壺や瓶には、その肩部から胴部にかけて、自然釉が流れているものが多い。この釉の流れは、当時どのようなイメージをもって眺められていたのであろうか。「宝瓶」のイメージのひとつに、その中からいのちの源である精気や妙なる宝物が、尽きることなく溢れ出てくるというものがある。妙なる「宝瓶」のように、おめでたいものがどンドン湧き出るイメージをもつつわとして、「酒壺」にも注目してみたい。

謡曲「猩々」にあらわされた「酒壺」は、中世人たちの「酒壺」に対して抱いたイメージをじつに生き生きと伝えている。「猩々」は、唐土・揚子の里の高風(ワキ)という親孝行な酒売りのもとへ、海中に棲む妖精である猩々(シテ)が現れて、酒に酔いつつ舞い戯れた後、汲んでも尽きない「酒壺」を与えて祝福するという祝言物の曲である。

このような「汲むめども尽きぬ酒壺」のイメージは、時代を経て様々な広がりをもつことになる。近世に入る例ではあるが、鍋島焼の「色絵壺に流水文皿」*2では、二つの壺から酒とも目される液体が尽きることなくどンドンあふれ出し、泉をなしている様子を描いている。ここに挙げたような、「宝瓶」が湧き出させるエネルギーを表象するものとして、瓶や壺の口部や肩、胴に流れる自然釉が注目されたのではないだろうか。

瓶の口から肩、胴へと流れ出る釉の流れは、水や酒ばかりでなく、



※1 愛染明王図(南北朝時代)



※2 色絵猩々壺文皿 鍋島様式(17世紀後期)



※3 渥美窯 秋草文壺(平安時代後期/12世紀) 慶応義塾大学

時として生命の根源である妙なるエネルギーのようなものとも見做されたのではない。平安時代前期に遡る愛知県の渥美窯産の「秋草文壺」*3には、灰釉が滝のように流れている。このような釉の流れは、その後近世に登場する茶道具の景色(例えば、茶入における釉の流れ)にまで受け継がれていくと私は考えている。

荒川 正明(あらかわ・まさあき)

1961年生まれ。1987年から2008年まで(財)出光美術館 学芸員を務め、2008年より現職。主な著書に『板谷波山の生涯』(河出書房新社/2001年)、『やきもの見方』(角川選書/2004年)、『やきもの楽しみ方』(池田書店/2009年)、『日本美術全集10 黄金とわび(桃山時代)』(小学館/2014年)。

六古窯を考古の視点で見る

中世六古窯への誘い

元愛知県陶磁資料館 館長補佐
井上 喜久男

現在、日本の中世窯は、北は岩手県から南は鹿児島県徳之島まで87箇所の窯業地が確認されている。しかし、第二次大戦前までは瀬戸・常滑・信楽・丹波・備前の五古窯の活動が知られているに過ぎなかった。小山富士夫は昭和17年に中世まで遡る越前窯を確認し、既存の五古窯に越前窯を加えて六古窯の構想を固め、第二次大戦後に中世窯を「日本六古窯」、「中世六古窯」あるいは単に「六古窯」の名称で呼ぶことを提唱した。

その後、満岡忠成により六古窯は製陶の伝統が現代までも及んでいる窯業地であるとの定義付けが行われた。

その六古窯は施釉陶器の瀬戸窯と焼締陶器の常滑・信楽・越前・丹波・備前の五古窯に分かれ、瀬戸窯の灰釉・鉄釉の釉陶美と五古窯独特の窯変の焼肌が特徴である。瀬戸窯は武士・寺社・富裕農民層の高級施釉陶器の志向に応じて中国陶磁を祖形としながら作陶が行われ、その施釉陶器は粘土紐輪積み成形によって瓶子や水注・四耳壺などが造形され、器面の印花文・画花文・貼花文に灰釉および鉄釉の厚い光沢釉が掛けられ、装飾文様と濃淡の乱れある釉調と相まって変化に富んだ釉色の彩りとなり、錦を見るような感覚と躍動感ある力強さを醸し出している。中心的な器種は神前に奉納する御酒器の瓶子、型耳の四耳壺、手付水注、袴腰形と筒形の香炉、細頸形と尊式の仏花瓶、中国青瓷の酒会壺を模倣した広口壺などが印花・画花・貼花の各種装飾で施され、紐造り成形による和様化した形姿を造り出し、また、喫茶の流行による轆轤水挽き成形の天目・茶入が焼造されている。

他方、五古窯の焼締陶器は壺・甕・大平鉢を中心とした焼成器種で、貯蔵容器を主として中世社会の需要に応じて下支えている。その焼締陶器は在地特有の陶土が炎の魔力によって七変化し、薪燃料の降灰が熔けて自然釉が掛かり、常滑・越前窯は褐色の地肌に

淡緑色の自然釉、信楽窯は白色長石粒が吹き出した赤褐色混じりの褐色地肌に黄緑色の自然釉と釉際の焦げ、丹波窯は光沢のある明褐色地肌に淡緑色の自然釉、備前窯は赤黒い地肌の黒光りや黄白濁斑の降りかかった自然釉が特徴であり、それぞれ窯変による変化に富んだ焼肌が魅力である。

それらの焼締陶器は粘土紐の輪積み成形によって造形されていることから焼き上がりに歪みのある器形への変化が観られ、さらに火表には肩から胴部に自然釉が掛かった部分と無釉地肌との片身替わりの器面が現出して器面に彩りが生じた。それらの自然釉と地肌の片身替わり及び歪みを伴う焼締陶器は、中世陶器の基本的な造形の特徴となり、美術的鑑賞の対象とする意識を芽生えさせて15世紀末以後の茶の湯の花入・水指などの造形に取り入れられた。その造形は轆轤成形された円筒を押圧して三角や四方の歪みを施し、篋目を巡らして轆轤目と交錯させて器面に変化を求めるなど成形段階から作意を凝らした茶道具の形姿に繋がっている。

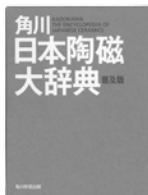
六古窯の中で、海岸に近い常滑・越前・備前の各窯は海路を利用し、常滑窯は太平洋沿岸域に、越前窯は北陸から北海道までの日本海沿岸域に、備前窯は瀬戸内から紀伊半島南岸域にそれぞれ販路を拡大した。また、内陸部に位置する信楽・丹波の二窯は、陸路輸送を主として在地周辺域の需要に応じ、京都などの都市需要を求めている。

瀬戸窯は中世唯一の施釉陶器産地として君臨し、常滑・信楽・越前・丹波・備前の五古窯は在地の粘土の特性に合わせた成形および焼成技法が工夫され、貯蔵容器としての性格を持ちながらもそれぞれ美術的に独特の形姿を持っており、個性豊かな中世陶器の魅力を発揮している。

井上 喜久男 (いのうえ・きくお)

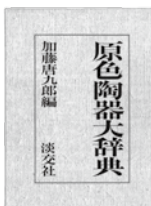
1949年埼玉県生まれ。名古屋大学大学院文学研究科博士課程前期課程修了。名古屋大学文学部考古学研究室、宮内庁書陵部を経て、1980年3月より愛知県陶磁資料館、2010年3月定年退職。2007年小山富士夫記念賞「功績褒賞」受賞。

本ガイドブックを読み、六古窯をさらに多様な視点で深めたい人に向けて、8冊の参考図書を紹介します。



編纂：矢部良明
『角川日本陶磁大辞典 普及版』
株式会社KADOKAWA、2011年

縄文土器からはじまる、六古窯成立までとその後の日本陶磁史の系統図を記載。また、日本の古窯分布図が古墳・奈良時代から年代別に記され、中世の六古窯以外の窯の分布を確認できる。



加藤唐九郎
『原色陶器大辞典』
淡交社、1972年

現代陶芸の第一人者である加藤唐九郎が晩年に作陶の手を止め仕上げた、氏の渾身の1冊。当時の最高水準の専門家12名の協力を得て、技術・史実・鑑賞といった、やきものについてのあらゆる事柄をまとめ上げた大辞典。



小山富士夫
『小山富士夫著作集(中) 日本の陶磁』
朝日新聞社、1978年

六古窯の各産地に関する紀行文を収録。日本六古窯という名称について「当時の大きな製陶センターという点では間違っていない」と記す、赤裸々な語り口も絶妙。



監修：植崎彰一
『古窯の譜 中世のやきもの 六古窯とその周辺』
MIHO MUSEUM、2010年

中世の六古窯と、ほか窯業地のやきものを一堂に集め全国巡回した、展示会の図録。特に、石川県能登半島の珠洲窯、愛知県渥美半島の渥美窯のやきものは実物を見ずにはいられなくなった。



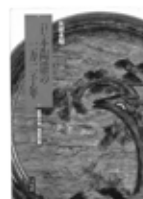
神崎宣武
『やきもの紀行 窯場からのレポート』
未来社、1984年

民俗学者による、やきものの産地を徹底的に歩いて、見て、聞いたさまざまな事実の記録。六古窯では、備前、丹波、常滑、瀬戸の記録が掲載されており、産地の息づかいをも感じることができる。



神崎宣武
『やきもののはなし』
さ・え・ら書房、1982年

小学生向けの入門書。歴史、つくられ方、文化的な役割など、身近なやきものについて誰もがわかりやすく学べる良書。良いやきものを選んで使うことを勧める著者のメッセージが心に響く。



矢部良明
『日本陶磁の一万二千年』
平凡社、1994年 ※版元在庫切

縄文時代から昭和時代まで、変化していく日本の状況とやきもの関係を紐解く1冊。第4章「市民の時代の陶器」にある各古窯の考察は、本書と合わせて読んでほしい。



監修：小山富士夫
『別冊 歴史手帖 No.2 特集・日本やきもの史』
名著出版、1974年

六古窯を提唱した小山富士夫監修の1冊。本プロジェクト始動にあたり、小山氏が手がけた本書の構成と、その思想を託された人々の言葉を参照し、大きな方針を探った。

協力者一覧(団体・個人、五十音順、敬称略)

INAX ライブミュージアム
越前町織田文化歴史館
大阪府
公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団
国立国会図書館
滋賀県工業技術総合センター信楽窯業技術試験場
滋賀県埋蔵文化財センター
滋賀県立安土城考古博物館
公益財団法人瀬戸市文化振興財団
丹波古陶館
丹波立杭陶磁器協同組合
劍神社
万博記念公園マネジメント・パートナーズ
福井県立越前古窯博物館
福井県陶芸館

北野左京
KENSE
鯉江節子
清水源二
中村真二
前川賢吾
松本修
ルイズ・コート

ご指導・ご協力をいただきました方々に対し、
ここに深い感謝の意を表します。

『旅する、千年、六古窯』ガイドブック

発行：2019年3月

発行元：六古窯日本遺産活用協議会

[福井県越前町、愛知県瀬戸市、愛知県常滑市、滋賀県甲賀市、兵庫県篠山市、岡山県備前市]

事務局(備前市産業部産業観光課内)

〒705-0022 岡山県備前市東片上126

TEL 0869-64-1832 FAX 0869-64-1850

編集：MUESUM(多田智美+永江大)

デザイン：UMA/design farm(原田祐馬+西野亮介)

写真：加藤晋平(p.19, p.29, p.49, p.59, p.69)

イラスト：谷小夏(p.6)

「平成30年度文化芸術振興費補助金(日本遺産魅力発信推進事業)活用事業」

※本誌は、「旅する、千年、六古窯」プロジェクトの一環で発行されました。

「旅する、千年、六古窯」プロジェクト

クリエイティブ・ディレクター：高橋孝治 「旅する、千年、六古窯」

クリエイティブチーム：アートディレクター／原田祐馬[UMA/design farm]

エディトリアルディレクター／多田智美[MUESUM] 映像ディレクター

／岡篤郎 Webディレクター／綿村健[FROTSQUARNEL CO.LTD.]

公式カメラマン／加藤晋平

